

棟方 辰雄（むなかた・たつお）

1、プロフィール

歌人。文芸全般に優れていたが、病床にあって短命であったため、歌集などは残していない。この他、絵画にも才を発揮した。

<生没>

1903(明治 36)年 ~ 1929(昭和 4)年 7 月 26 日

<代表作>

「雲を呼び風巻き起す虎や龍、送り繪凄き扇燈籠かな」

「ホラ貝の音にも戦氣はみなざれり、猛虎一聲山月高し」

「見送り」は笛を奏づる支那美人、はたはたゆれて角をまがれる」

辰雄が東京帝大附属病院の病床で歌ったという。昭和 11 年に発刊された一戸玲太郎の方言詩集『ねぷた』の表扉裏に挿入されている。

<青森との関わり>

弘前市出身。画家棟方寅雄の令弟。弘前市にあった角はデパートで開催された「西班牙社洋画展覧会」に、「静物」などの絵画を出品した。

2、作家解説

明治 36 年弘前市小人町に、父大助、母ノヨの三男として出生。

県立弘前中学校在学時、笹森猛正、平田小六、山鹿十郎らと悉く学校当局に反逆する。大正 9 年、同校を自主退学。翌年上京し、歌舞伎の絢爛たる舞台に魅せられる。帰郷後は弘前市立図書館で、近松門左衛門、河竹黙阿弥などを読破。後に、嘉瀬小学校の代用教員となる。しかし、教壇生活は長続きせず、同 13 年、弘前の生家に舞い戻る。辰雄は油絵も描いており、同 12 年から、弘前市百石町角はデパートで開催されていた「西班牙(スペイン)社洋画展覧会」に「静物」などの絵画を出品した。

昭和 2 年、二度目の上京をする。知人の斡旋で職を得る予定だったが、弘中を中退したという経歴が災いして不調に終わり、新聞配達や牛乳配達、他にも職を転々として生活していた。翌 3 年になると体調を崩し、東京帝大附属病院に同郷（弘中卒）の丸山亀久治医師を訪ね、入院加療となった。病名は「遷延性心臓内膜炎」（当時、不治の病）である。鬼籍の人となる同 4 年 7 月 26 日まで、一年半の入院生活を送ることになる。享年 26 歳。

入院中の病床で、「白牀歌抄」（はくしょうかしょう）と名付けた紙面に、担当の見習看護婦たけへの相聞歌（恋歌）と津軽への望郷の歌を綴った。残念ながら、友人の須藤均治によれば、これらの作品は自身の手で悉く破棄したと言われる。

「雲を呼び風巻き起す虎や龍、送り繪凄き扇燈籠かな」（他二首）、この歌は、同 11 年発刊された一戸玲太郎の方言詩集『ねぷた』の表扉裏に挿入され、出版記念会の冒頭、歌人古川健蔵によって朗詠された。

辰雄が入院加療に専念していた病床を、同郷の友人平田小六が度々見舞っている。当時、平田は東京毎日新聞社の記者、作家であった。代表作『囚われた大地』を同 9 年に発表した平田は、翌年、フィクション小説「患者」を雑誌「文学界」に発表する。主人公「患者宗方」は棟方辰雄、相手役「笹井タケ」が見習看護婦のたけである。確実に死を覚っていた宗方は微かに残る生命力の全てを振り絞って、必死にタケを追い求めた。臨場感あふれる字面に引き込まれる。